

二〇二五年度 早稲田大学大学院文学研究科 入学試験問題
 【修士課程】 専門科目 日本語日本文学コース ※解答は別紙(縦書)

注意事項

- 1 問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 2 受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。
- 3 問題はこのページを含めて1～7ページである。
 問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に専攻する専門分野の選択肢が掲出するので、該当するものを○で囲むこと。
 問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、問題二全体の得点はゼロとなる。
 問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。
- I 日本語学領域 2ページ
 II 古典文学領域 3～4ページ
 III 近現代文学領域 5～7ページ

- 4 解答用紙は四枚表裏。1～8ページである。問題との対応は次の通り。

問題一	1ページ
問題二	1～2ページ
問題三	3～4ページ
	3～4ページ
	5～8ページ
I 日本語学領域	3～4ページ
II 古典文学領域	3～4ページ
III 近現代文学領域	5～8ページ

* 解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。

* 設問の指示に従い、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

問題一 〔共通問題〕

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

問題二 〔共通問題〕

- ・次のABC群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
- ・一般外国語で「日本語」を受験する者は、ABCのいずれか一つの群の代わりとしてG群の間を選択できる。
- ・解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号(A1など)を明記せよ。
- ・三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無回答の場合、問題二全体の得点は零となる。

【A群】日本語学領域

- A1 日本語の撥音「ん」について、具体例を挙げながら音韻と音声の観点から説明せよ。
- A2 才段長音の仮名遣いが「おおかみ」「おうさま」の傍線部のように二通りとなることについて、知るところを述べよ。
- A3 日本語の時制(テンス)の特性について知るところを述べよ。

【B群】古典文学領域

- B1 日本古典文学作品における「死」について、具体例を挙げて述べよ。
- B2 日本古典文学作品と絵画との関係について、具体例を挙げて述べよ。
- B3 日本近代文学の作家における古典文学作品の素養について、具体例を挙げて述べよ。

【C群】近現代文学領域

- C1 近現代文学において自然災害はどのように取り上げられてきたか、具体的な例を挙げて論評せよ。
- C2 近現代文学は社会運動との関わりの中でどのような役割を果たしてきたか、具体的な例を挙げて論評せよ。「社会運動」の概念範囲は幅広いが、各自の関心に合わせて考えてくれればよい。
- C3 比較文化の視点から近現代文学を捉え直すような可能性はあるか、具体的な例を挙げて論評せよ。

【G群】一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のABC群の中の一つの群の代わりとして選択できる問題。

- G1 あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、代表的な論文・研究書または研究者名を具体的に挙げて説明せよ。

問題三 〔選択問題〕 I II IIIから一領域を選択回答せよ。

I 日本語学領域

- 1 各自の関心がある研究領域において、資料(データ)を取り扱う上で留意すべきことがらを具体的に述べよ。
- 2 次のA～Fから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。
 - A 日本語の語音配列則について、具体例を挙げながら音韻史の観点から説明せよ。
 - B いわゆる「四つ仮名」について、地理的分布と文献資料の観点から知るところを述べよ。
 - C 数量詞に関わる文法現象について、品詞論的位置づけなども含めて述べよ。
 - D ポライトネス理論について知るところを述べよ。
 - E 日本の古辞書として具体的な例を一つ挙げ、それについて知るところを述べよ。
 - F 漢字片仮名交じり表記と漢字平仮名交じり表記の成立、発達や変遷について説明せよ。

Ⅱ 古典文学領域

（一）次に掲げる語群いゝうの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明せよ（一題につき五行程度）。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い	『校本万葉集』	ろ	大伴家持	は	『播磨国風土記』	に	『懷風藻』
ほ	讃岐典侍	へ	弄花抄	と	篁物語	ち	物語音読論
り	後撰和歌集	ぬ	頸注密勘	る	二条派	を	井上宗雄
わ	とはずがたり	か	沙石集	よ	太平記	た	古活字本
れ	北村季吟	そ	俳画と発句	つ	浮世絵と狂歌	ね	萩原広道
な	蒙求	ら	藤原明衡	む	太平御覧	う	空海

（二）次のA～Hの中から一題を選び、論述せよ（二十行程度）。

- A 柿本人麻呂の作歌活動。
- B 『古事記』の海神宮訪問譚。
- C 私家集と日記文学。
- D 『源氏物語』における史実と虚構。
- E 軍記物語と説話・伝承の関係。
- F 頼山陽。
- G 浅井了意。
- H 白居易と日本古典文学について。

(三) 次のアキの中から一つ選び、本文の直後の（ ）内の指示に従って解答せよ。

(ア)

若浦爾塩満来者滷乎無美葦辺乎指天多頭鳴渡

(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

(イ)

塩許々袁々呂々邇画鳴引上時自其矛末垂落塩之累積成島

(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

(ウ)

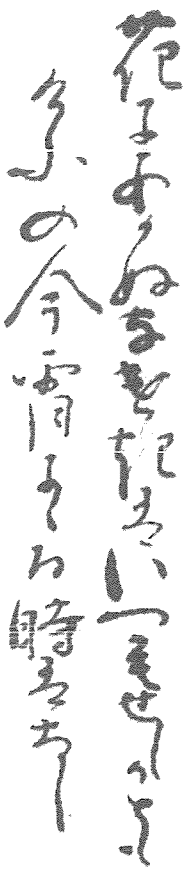


(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。

早稲田大学図書館所蔵 『九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書8 浅間抄』 勉誠出版 2009年から転載

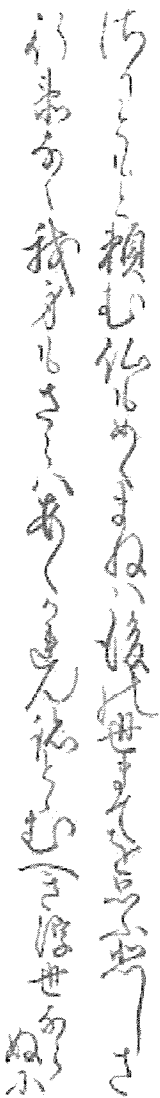
(エ)



(右の影印を翻字し、濁点を付し、現代語訳せよ。)

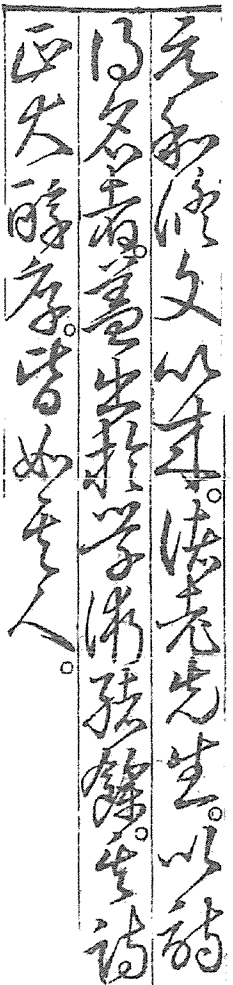
※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。
 早稲田大学図書館所蔵

(オ)



(右の影印の和歌二首を翻字せよ。)

(カ)



(右の草書で書かれた短い漢文を楷書に翻字して、現代語訳を記せ。)

(キ)

筆銘

詩人之具唯筆為先揮鋒有術一人當千

(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。

『群書類従』第171・172冊（巻1281・129）刊、国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2559126>

III 近現代文学領域

(一) 次のA1と2、B1と2は、日本の近現代文学の代表的な作品の一節である。これら四つについて、①用語・文体・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自由に論ぜよ。

A1 二葉亭四迷「浮雲」

第三回 諒程風變な戀の初客入 下

今年の仲の夏有一夜文三が散歩より歸つて見れば叔母のお政は夕暮より所用あつて出た儘未だ歸宅せず下女のお鍋も入湯にでも参つたものか是れも留守、唯お勢の子舎に而已光明が射してゐる。文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登つたが不圖立止まり何か切りに考へながら一段降りてまた立止まりまた考へてまた降りる……俄かに氣を取直して將に再び二階へ登らんとする時忽ちお勢の子舎の中に聲がして

「誰だ」

「私」

ト返答をして文三は肩を縮める

「ア誰方かと思つたら文三さん……淋敷くてならないから些とお断しに入つしやいな」

「エ多謝う、だが最う些と後にしませう」

「何歟御用が有るの」

「イヤ何も用はないが……」

「それぢやア宜ぢやア有りませんか、ネー入ツしやいヨ」

文三は些し躊躇て梯子段を降果てお勢の子舎の入口まで参りは参つたが中へとは立入らず唯竝立でゐる

「お這入なさいな」

「エ、エ……」

ト言つた儘文三は尙ほ竝立でモデ／＼してゐる。何歟這入り度もあり這入り度くもなしといった様な容子

「何故貴君、今夜に限つてさう遠慮なさるの」

「デモ貴嬢お一人ツ切りぢやア……なんだか……」

「アヤア貴君にも似合はない……アノ何時か氣が弱くツちやア主義の實行は到底覺えないと仰しやツたのは何人だツけ」

ト嬢の首を斜に傾しげて燦然片頬に含んだお勢の微笑に釣られて文三は部屋へ這入り込み坐に着きながら

「さう言はれちやア一言もないがしかし……」

「些とお這ひなさいまし」

トお勢は團扇を取出して文三に勧め

「しかしどうしましたと」

「エ、ナニサ影口がどうも五月蠅くて」

「それはネ、どうせ些とは何とか言ひますのサ、また何とか言つたツて宜ぢやア有りませんか若しお相互に潔白なら、どうせ貴君二千年來の習慣を破るんですものヲ多少の艱苦は免れツこは有りませんワ」

「トハ思つてゐるやうなもの、まさか影口が耳に入ると厭なものサ」

「それはさうですヨネー。此間もネ貴君、鍋が生意氣に可笑しな事を言ツて私にからかうのですよ、それから私に五月蠅なツたから到底解るまいとおもひましたけれど試に男女交際論を説いて見たのですヨ。さうしたらネ、アノなんですつて、私の言葉には漢語が雜ざるから全然何を言つたのかわかりません……眞個に教育のないといふ者は仕様のないもんですネー」

「アハハハ其奴は大笑ひだ……しかし可笑しく思つてゐるのハ鍋ばかりぢやア有りますまい。必と母親さんも……」

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから始終可笑しな事を言ツちやアからかいますのサ、其れでもネ其たんに私が辱しめ／＼爲い／＼したらあれでも些とは耻ぢたと思えてネ此頃ぢやア其様に言はなくなりましたよ」

「ヘーからかう、どんな事を仰しやツて」

「アノーなんですつて其様に親しくする位なら寧ろ貴君と……(すこしもぢ／＼して言かねて)結婚して仕舞へつて……」

A2 森鷗外「普請中」

渡辺参事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。

雨あがりの道の、ところ／＼に残つてゐる水溜まりを避けて、木挽町の河岸を、通信省の方入行きながら、たしか此辺の曲がり角に看板のあるのを見た筈だと思ひながら行く。

人通りは余り無い。役所帰りらしい洋服の男五六人のがや／＼話しながら行くのに逢つた。それから半衿の掛かつた着物を着た、お茶屋の姉えさんらしいのが、何か近所へ用達しにでも出たのか、小走りに摩れ違つた。まだ幌を掛けた儘の人力車が一台跡から駈け抜けて行つた。

果して精養軒ホテルと横に書いた、割に小さい看板が見附かつた。

河岸通りに向いた方は板囲ひになつてゐて、横町に向いた寂しい側面に、左右から横に登るやうに出来てゐる階段がある。階段は尖を切つた三角形になつてゐて、その尖を切つた処に戸口が二つある。渡辺はどれから這入るのかと迷ひながら、階段を登つて見ると、左の方の戸口に入口と書いてある。

靴が大分泥になつてゐるので、丁寧に掃除をして、硝子戸を開けて這入つた。中は広い廊下のやうな板敷で、ここには外にあるのと同じやうな、棕櫚の靴拭ひの傍に雑巾が広げて置いてある。渡辺は、己のやうなきたない靴を穿いて来る人が外にもあると思ひながら、又靴を掃除した。

あたりはひっそりとして人気がない。唯少し隔たつた処から騒がしい物音がするばかりである。太平が這入つてゐるらしい物音がする。

外に板囲ひのしてあるのと思ひ合せて、普請敷中だと思ひ、誰も出迎へる者がないので、眞直に歩いて、衝き當つて、右へ行かうか左へ行かうかと考へてゐると、やつとの事で、給仕らしい男のうろついてゐるのに、出合つた。

「きのふ電話で頼んで置いたのだがね。」
「は。お二人さんですか。どうぞお二階へ。」
右の方へ登る梯子を教へてくれた。すぐに二人前の注文をした客と分かつたのは普請中殆ど休業同様にしてゐるからであらう。此辺まで入り込んで見れば、ます／＼釘を打つ音や手斧を掛ける音が聞えて来るのである。

梯子を登る跡から給仕が附いて来た。どの室かと迷つて、背後を振り返りながら、渡辺はかう云つた。

「大分賑やかな音がするね。」
「いえ。五時には職人が帰つてしまひますから、お食事中騒々しいやうなことはございませぬ。暫くこちらで。」

先へ駆け抜けて、東向きの室の戸を開けた。這入つて見ると、二人の客を通すには、ちと大き過ぎるサロンである。三所に小さい卓が置いてあつて、どれをも四つ五つ宛の椅子が取り巻いてゐる。東の右の窓の下にソファもある。その傍には、高さ三尺許の葡萄に、暖室で大きい実をならせた盆栽が据ゑてある。

渡辺があちこち見廻してゐると、戸口に立ち留まつてゐた給仕が、

「お食事はこちらで」と云つて、左側の戸を開けた。これは丁度好い室である。もうちやんと食卓が拵へて、アザレエやロッドランドロンを美しく組み合せた盛花の籠を真中にして、クウエエルが二つ向き合せて置いてある。今二人位は這入れよう、六人になつたら少し窮屈だらうと思はれる、丁度好い室である。

渡辺は稍々満足してサロンへ歸つた。給仕が食事の室から直ぐに勝手の方へ行つたので、渡辺は始めてひとりになつたのである。

B1 深沢七郎「楢山節考」

第一回中央公論新人賞受賞作品

楢山節考

深沢 七郎

山と山が連つていて、どこまでも山ばかりである。この信州の山々の間にある村——向う村のはずれにおりんの家はあつた。家の前に大きい樺の根の切株があつて、切口が板のように平たいので子供達や通る人達が腰をかけては寝てゐた。だから村の人はおりんの家のことを「根つこ」と呼んでいた。嫁に來たのは五十年前のことだつた。この村ではおりんの實家の村を向う村と呼んでいた。村には名がないので兩方に向う村と呼びあつていたのである。向う村と云つても山一つ越えた所だつた。おりんは今年六十九だが亭主は二十年前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行つた時、谷底へ轉げ落ちて死んでしまつた。後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になつた辰平の後妻を探すことの方が頭が痛いことだつた。村にも向う村にも恰好の後家などなかつたからである。その日、おりんは待つていた二つの聲をきいたのである。今朝裏山へ行く人が通りなが

ら唄つたあの祭の歌であつた。

楢山祭りが二度来りやよ

栗の種から花が咲く

もう誰か唄い出さないものかと思つていた村の盆踊り唄である。今年にはなかなか唄い出されなかつたのでおりんは氣にしていたのであつた。この歌は三年たてば三つ年をとるという意味で、村では七十になれば楢山まいりに行くので年寄りにはその年の近づくのを知らせる歌でもあつた。

おりんは歌の過ぎて行く方へ耳を傾けた。そばにいた辰平の顔をぬすみ見ると、辰平も歌聲を追つてゐるやうに頸をつき出して聞いていた。だがその目をデロツと光らせてゐるのを見て、辰平もおりんの供で楢山まいりに行くのだが今の目つきの様子ではやつぱり氣にしてい

てくれたかと思うと

「倅はやさしい奴だ！」

と胸がこみあげてきた。

おりんが待つていたもう一つの聲は、實家から飛脚が來て向う村に後家が一人出來たことを知らせに來てくれたのである。その後家は辰平と同じ年の四十五で、三日前に亭主の葬式がすんだばかりださうである。年恰好さえ合えばそれできまつてしまつたと同じようなものだつた。飛脚は後家になつたものがあることを知らせに來たのだが、嫁に來る日までをきめて歸つて行つた。辰平は山へ行つて留守だつたが、おりんが一人できめてしまつたというより飛脚の云うことを聞いていただけで萬事かきまつてしまつたのである。これで辰平が歸つてくればそのことを話さえすればよいのである。どこの家でも結婚問題などは簡単に片ついてしまうことで、好きな者同士が勝手に話し合

B2 林京子「空罐」

ギヤマン ビードロ

空罐

林 京子

校舎は、コの字形のコンクリート四階建てである。私たち五人は、その校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央に立つていた。時間は午後一時半をすぎている。太陽は西に廻りはじめて、中庭には校舎の影が写つてゐる。五人が立つてゐる場所も、既に陰になつてゐる。

しかし、まだ、西向の講堂には、陽が一杯にさしてゐた。

洗面所の使用法について、一言「腰に両手をあてて、大木が四人に向つて言つた。それは誰? その口調は、と西田が、大木を指して考える表情をする。あれは誰だつたか。洗面所の使い方はかりを注意する先生が、確にいた。かめのこだわし、突然思い浮かんだ恩師の仇名を、私は大声で叫んだ。いやあ、と長崎弁特有の、柔らかない注意のしかたで、原が、私のオーバーコートの袖を引いた。そして、職員室に聞こえるよ、と言つた。三十年も前の教師たち

が、いま、職員室にゐるはずがなかつた。三十年前の教師たちばかりではない。職員室には、もう誰もいない。

かつての私たちの母校は、来年一杯で廃校になつてしまふ。生徒たちも、長崎市街を見おろせる台地に建つた、新校舎に移転してしまつてゐる。さっき、校門を入る時に見かけたのだが、玄関の車まわしに植えてあつたフェニックスは掘り起こされて、根を、あら延で包んであつた。私たちが女学生の頃にも、車まわしにフェニックスが植えてあつた。枝ぶりからみて、多分おなじ木なのだろう。根元から三本に分かれたフェニックスは、三十年の歳月の間に、七、八米の大木になつてゐる。この木も、新校舎の方に植えかえられるのだろう。

校舎の内には、私たち以外には、誰もいない。城壁のようにつつ立つた校舎は、コンクリートの壁面に音を吸ひとつてしまつて、物音一つたてずに静まつてゐる。

緊急通達事項が起きると、私たちは、よくこの中庭に集合させられた。大木が口真似をしている教師は理科の男教師で、緊急通達が終わると、ええ、と生徒に向つて話しかけながら、せかせか歩いて朝礼台に登る。そして大木の口真似どおり「洗面所の使用法について」と話を切り出す。生理用具の処理のしかた、水の流し方、使用上の注意を事こ

まかに説明して、特に冬になると便所の管が凍つて水が外部に溢れ出してしまう、そのために校舎の外壁に白い水もれの跡がついて、はなはだしく校舎の美観を損なう、と流れの跡を指して私たちに注意する。終戦直後の殺伐とした時代ではあつたが、やはり少女である私たちは恥ずかしかつた。中庭に立つて、まっ先に大木が想い出したのも、恥ずかしい思いが印象に深かつたからだろう。その白い、水の流れの跡は巾を広げて、いまでも残つてゐる。

(二) 次の中から四題を選び、論評せよ(選んだ番号を、指定欄に記すこと)。

- 1 明治一〇年代の文学状況を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 2 内務省検閲と近現代文学との関連について、具体的な作品をあげて論評せよ。
- 3 翻訳文学と近現代文学とのかかわりを、具体的な作品をあげて論評せよ。
- 4 移民をテーマとする近現代文学について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 5 アジア・太平洋戦争と近現代文学との関連について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 6 「第三の新人」の文学の特色を、複数の作家と作品に言及しながら論評せよ。
- 7 近現代文学における生成論の可能性について、具体的な作品をあげて論評せよ。
- 8 近現代文学とアダプテーションとのかかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 9 近現代文学研究とデジタル化について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 10 近現代文学にかかわる近年の資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ(以上)とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	カナ
	漢字

この欄以外に受験番号、氏名を記入しないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

日本語日本文学

総 点

——ここから記入すること——

問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、「」内の該当する時代等、
ならびに散文・韻文にも○を付すこと。
日本語学領域
古典文学領域 「上代・中古・中世・近世・和漢比較文学」／ 散文・韻文
近現代文学領域

問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例 A1）を明記すること。

（裏へ続く）

—これより先の余白には絶対に記入しないこと—

(次ページへ続く)

——ここから記入すること——

問題三

I 日本語学領域／II 古典文学領域（選択した領域を○で囲め）※問いの番号や選択した記号を適宜明記すること

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次ページへ続く)

——ここから記入すること——

問題三

Ⅲ 近現代文学領域

(一) A 1

(一) A 2

(裏へ続く)

(一)
B
1

(一)
B
2

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次ページへ続く)

———ここから記入すること———

(11) ()

(11) ()

(裏へ続く)

(1) ()

(1) ()

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——